

「地理総合」に向けての授業例～「半日観光ガイド」プラン

藤女子高等学校 非常勤講師 大久保 雅弘

1 はじめに

会誌 54 号で「半日観光ガイド」プランを報告しました。今回も昨年の「半日観光ガイドプラン」について紹介します。

参考資料として、夏休み前に市内観光地図を全員に配布しました。昨年から観光地図が一新され、QR コードをスマホで読み取ると URL が表示されるタイプになりました。昨年と同様に生徒がオンライン授業で慣れているグーグル・クラスルーム経由で提出する方法をとりました。

2 生徒配布資料

5年 身近な地域の調査

⇒夏休みの宿題。

昨年と同じく「半日観光ガイドプラン」を実施します。

今年は前期中間試験が遅れたので、期末試験までの授業時間が少ないです。

このため、期末試験の配点を減らし、夏休みの宿題との合計点で前期の評価を出します。定期テストが苦手な人は提出点を稼ぎましょう。

北海道では「観光」は重要な産業です。特に札幌市は道内小中学校、道外高校生の修学旅行先として人気があります。

新型コロナ終息後、道外からの高校生に札幌を紹介するコースを考えてみましょう。時計台・テレビ塔・大通公園という定番コースではなく、美術館巡り、博物館巡りなど個性的なコースを歓迎します。

新型コロナ感染防止のため、ネット検索だけでプランを作成します。寄宿生は、帰省先の紹介でも勿論OKです。

⇒来年度から地理が必修化

日本の高校生は、全員「地理総合」を学ぶようになります。「地理総合」では、「観光」の内容が充実します。「半日観光ガイドプラン」は、地理授業の参考例になります。

来年の札幌地理サークル会誌(高校の地理先生の集まり)に個性的なものを掲載します。昨年は3点ありました、「石川啄木を味わう in 函館」「本郷新美術館に行こう」「えっ?北海道に義経と弁慶も来ていたの」

昨年のガイドプラン一覧⇒<http://kokusairikai.web.fc2.com>

→藤女子高の授業例→半日ガイドプラン(2020)

⇒作業の手順

札幌市の観光地図の QR コードをスマホで読み取って、各観光施設の概要を調べます。その後、スマホやPCで他のウェブサイトを検索し、内容をまとめます。

オンライン授業で使ったクラスルーム経由で感想文・レポート用紙を利用して提出します。

⇒提出期限は始業式の前日 8 月 17 日(火)

3 2021 半日観光ガイドプラン一覧表

	プラン名		プラン名
I	1972SapporoOlympicWinterGames 聖地巡り	I	札幌の絶景
O	～絶景！円山観光～	U	屯田兵ゆかりの地-琴似
S	爆速北海道食い荒らし タイムスケジュール	K	自然と芸術にふれあおう
S	札幌夜景ツアー	S	夏の知床散策
T	スポーツおすすめスポット	H	暮らしに寄り添うさっぽろツアー きっと誰も知らないであろう
T	札幌ビールの旅	F	音威子府村の観光スポット
Y	自然と歴史を楽しめるガイドプラン	Y	家族とめぐる日帰り登別・白老ツアー
I	秋田の文化、歴史、自然を巡る旅へ	K	帯広・十勝で運気 up 旅
K	札幌芸術の森で遊ぶ ～①～④の半日観光～	H	札幌の地名にはアイヌ語が隠れている？
S	北海道☆風景観光☆	M	札幌のすごい建物巡り!!
T	札幌イチョシ風景巡り	M	北海道の歴史を学ぶ旅
T	円山エリアの定番観光スポット巡り	I	札幌 de ショッピング
N	札幌オリンピックに触れよう!!	O	札幌の二大コンサートホールで 音の芸術を堪能しよう
N	大倉山ジャンプ競技場	N	桑園・二十四軒エリア
N	新琴似・麻布界隈の歴史と街並み	N	桑園・二十四軒エリア
A	札幌の歴史をたどる旅	H	野幌森林公園で北海道の自然に触れよう

(高2 理系地理選択者 30 名)

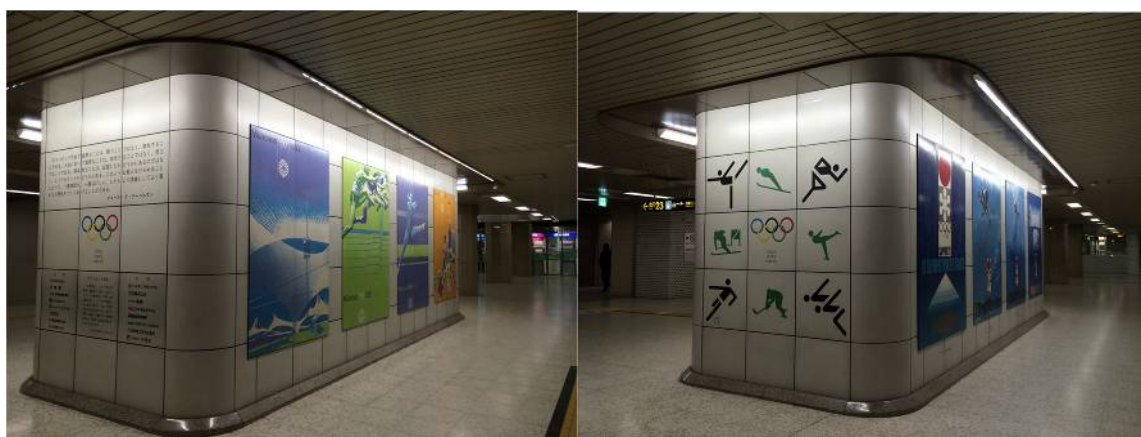
テーマ「1972 Sapporo Olympic Winter Games 聖地巡り」

今年はオリンピックイヤーですが...



実は札幌でも、1972年に冬季オリンピックが開催されたことがあるのをご存じですか？
それにまつわる聖地をご紹介します！

①さっぽろ駅 東豊線改札外 23番出口



こちらでは、当時の公式ポスターを見ることができます。
駅のホームで気軽にダイナミックなアートを楽しむことができる
穴場スポットです！

①→さっぽろ駅南北線真駒内行→大通駅→大通駅東西線宮の沢行→円山公園駅
→JR北海道バス「くらまる号」(有料)→② 約39分

②札幌オリンピックミュージアム



ここでは、札幌オリンピックの貴重な資料や選手が実際に使用していた道具などが展示されています。さらに、その際に行われていたスキージャンプやボブスレーなどの競技を体験でき、子供から大人まで楽しむことができます！

②→JR 北海道バス「くらまる号」(有料)→円山公園駅→円山公園駅東西線新さっぽろ行→大通駅→大通駅南北線真駒内行→真駒内駅→じょうてつバス→上町1丁目→③
約41分(タクシーだと②～③は約20分)

③真駒内セキスイハイムアイスアリーナ

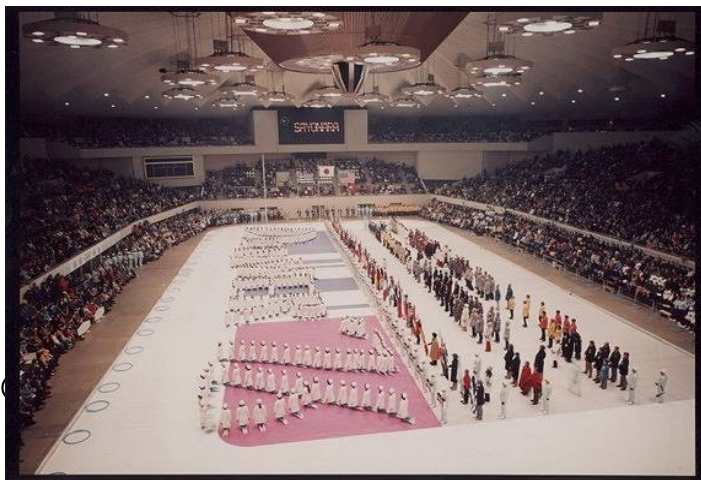


札幌オリンピック閉会式が行われた場所です。今ではスケートリンクやアーティストのライブの会場などで使われています。

当時の閉会式の様子

電光掲示板の部分をよく見ると「SAYONARA」の文字！

→今年の「ARIGATO」と同じようなことをしていたということが分かります！



④真駒内駅前



札幌オリンピックの際に女子選手宿舎となった建物です。

現在は2棟の11階建ての住宅となっています。

当時の女子宿舎の様子



これです！



札幌の二大コンサートホールで音の芸術を堪能しよう！

去年はベートーヴェンが生誕 250 周年、そして今年は「動物の謝肉祭」で有名なフランス出身のサン＝サーンスが没後 100 周年を迎える。

これらのメモリアルイヤーを迎えるにあたり、日本国中、さらには世界中でも多くの記念コンサートが開催された。

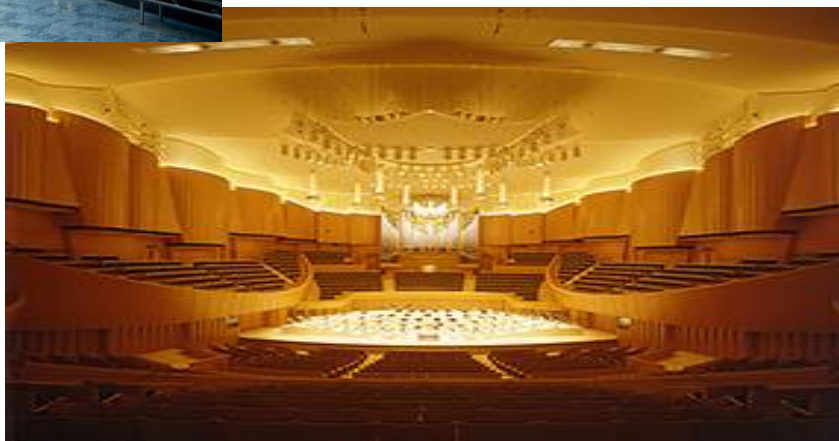
そこで欠かせないのが、コンサートを提供する最適な劇場やコンサートホールで、札幌には二つの素晴らしいコンサートホールがある。

札幌コンサートホール Kitara



1997年7月4日、市民の憩いの場として親しまれてきた中島公園に誕生。「Kitara」の由来はギリシャ神話の音楽神アポロンの楽器「キターラ」と「北」である。毎年夏に開かれる PMF のコンサートが多く開催される。

←エントランス



↑大ホール（「札幌コンサートホール Kitara」のサイトより引用）

- ・大ホール…2,008 席あり、シャンデリア付近には巨大な音響反射板がある。
- ・小ホール…453 席あり、室内楽やピアノ、声楽のリサイタルなどが行われる。

これまで様々な楽団、奏者によってコンサートやリサイタルが開催されてきた、札幌の芸術の中心とも言えるコンサートホールである。

アクセス:地下鉄南北線 中島公園駅から徒歩 7 分

引用サイト:札幌コンサートホール Kitara(<https://www.kitara-sapporo.or.jp>)



札幌文化芸術劇場 hitaru

2018年10月7日、オペラ「アイダ」をこけら落とし公演として開館。北海道内初となる多面舞台を備えており、オペラ・バレエ・ミュージカルや演劇・ポップスなど各種公演を鑑賞できる。

↑ エントランス

客席は2,302席、またオーケストラピット(バレエ・オペラ公演の際にオーケストラが演奏するための場所)が設置されている。

↓ ホール内部(どちらも「札幌市民交流プラザ」のサイトより引用)



これまで様々なオペラ、バレエ、ミュージカルが開催され、新たな「文化芸術に触れる場所」となりつつある。

アクセス:地下鉄大通駅出口から地下歩道直結で徒歩2分

引用サイト:札幌市民交流プラザ(<https://sapporo-community-plaza.jp/theater.html>)

札幌文化芸術劇場-Wikipedia

このように、札幌には例を見ない二つの優れたコンサートホールがある。

どちらも都市部に立地しているため、気軽に足を運び、音の芸術を存分に味わうことができる。

❀ 帯広・十勝で運氣 up 旅 ❀

十勝にはパワースポットがたくさんあり、心身ともに快適に過ごせるところです。

そこで、皆さんに厳選していくつかのパワースポットを紹介します！「運氣を上げたい！！」という方必見です！！

1. 幸福駅&愛国駅

住所：幸福駅：帯広駅幸福町東 1 線 161(JR 帯広駅より車で約 30 分)

愛国駅：帯広市愛国町基線 39 - 40(JR 帯広駅より車で約 20 分)

恋愛運 up 家族運 up

帯広に行ったら絶対に行くべき **HAPPY スポット!**

「愛の国から幸福へ」というキャッチフレーズで有名になった幸福駅。

愛国から幸福ゆきの切符が一大ブームになりました。



愛国駅では可愛いハート型の噴水や「幸福ゆき」の切符を型どったモニュメントがあり、それらは女性に人気の写真撮影スポットです。



また、幸福駅と愛国駅には近くにそれぞれ神社があります。
そこで更に**運気を up!**

2. 帯廣神社

住所：帯広市東 3 条南 2 丁目 1

全体運 up 発展運 up 厄除け

市内随一のパワースポット!

ご祭神は開拓三神の大國魂神、大那牟遲神、少彦名神。大那牟遲神は別名大国主神で、縁結びにご利益があります。

境内にはハート型の葉が特徴の桂の木があり、その葉を模した「かつら文（縁結び絵馬）」が毎年 4 月下旬から 10 月末の期間のみ授与されています。

恋愛成就のパワーが強いとされる満月の日だけはピンク色をした**特別な絵馬**が授与されています。



また、広大な境内の森にはかわいいエゾリスやたくさんの野鳥が生息しており、自然を楽しむこともできます。**運が良ければシマエナガ**が見られるかも...?

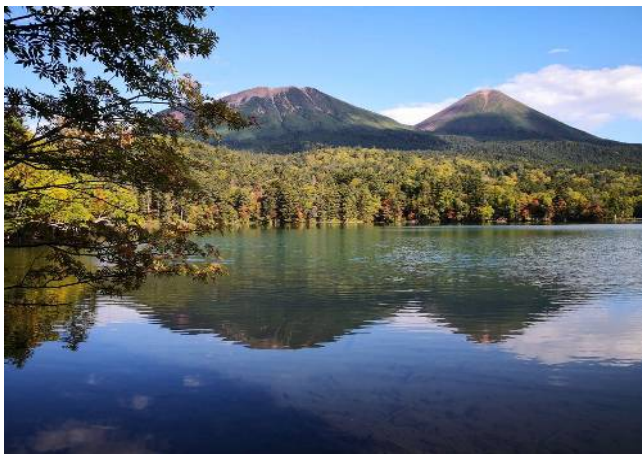
3. オンネトー

住所：足寄郡足寄町茂足寄原生林

恋愛運 up 金運 up

時間や季節によって刻々と色を変えることから「五色沼」という別名をもつ湖。

オンネトーから見て左側の山が**恋愛 up**に良いと言われる**雌阿寒岳**、右側の山がピラミッド型の**強力パワー**が宿ると言われる**阿寒富士**です。



4.十勝川温泉

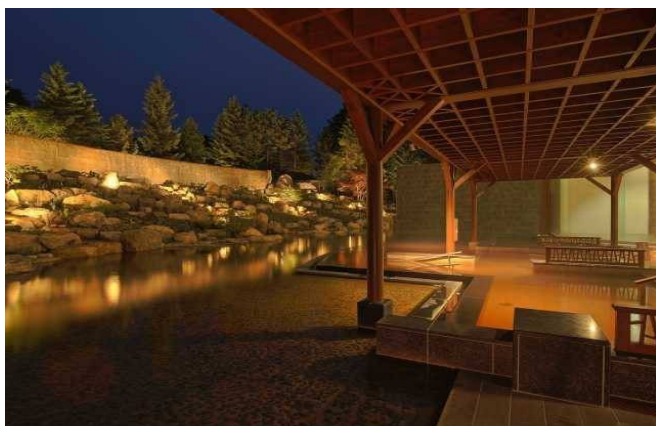
住所：河東群音更町十勝川温泉

ビューティー運 up

十勝に来たら**絶対**に行ってほしい場所 **No.1!**

十勝川温泉のモール温泉は「美人の湯」として名高く、**北海道遺産にも選定**されています。

天然保湿成分が多く、入浴後は**スベスベ肌**になることで知られています。体も癒され一石二鳥！！



帯広・十勝での観光ではレンタカーを借りるのがおすすめです。

仕事や勉強で疲れている方、どこに旅行に行くか悩んでいる方、帯広・十勝に観光に来ては
いかがですか？

～引用～

[【北海道・十勝】帯広観光コンベンション協会 - 十勝帯広の観光情報サイト \(obikan.jp\)](http://obikan.jp)

[朝ドラで人気上昇中！十勝&帯広の注目観光スポットをレンタカーで巡る1泊2日モデルコース |](http://orion-tour.co.jp)

[北海道 帯広・十勝 | おすすめ旅行プラン・モデルコースならオリオンツアー \(orion-tour.co.jp\)](http://orion-tour.co.jp)

[帯広市総合トップページ | 帯広市ホームページ 十勝 \(city.obihiro.hokkaido.jp\)](http://city.obihiro.hokkaido.jp)

4 ま と め

「観光ガイドプラン」は、観光地図の読み取り、観光地のネット検索、交通機関時刻表の利用、
まとめとしてのプレゼンテーションや巡検など、教員と生徒が気軽に実施できる地域学習といえます。

(引用・参考ウェブサイト)

札幌地理サークル <http://chiricircle.michikusa.jp>

ワールドリサーチ(気軽に国際理解) <http://kokusairikai.web.fc2.com>

平岸 麻畑からリンゴ園、そして市街地へ

平岸は豊平区の北西部にあり、北西境は豊平川、南は南区、西境は精進川、南東境には望月寒川が北へ流れています。

約4万年前以降に豊平川が形成した豊平川扇状地平岸面にあり、北へ緩やかに傾斜し真駒内で71.8m、平岸小学校正門で51.6m、平岸2条1丁目で33.7mの標高があります。最終氷期の終わった約1万年前以降に豊平川の流路が平岸面を侵食しながら西へ移動し新しい豊平川扇状地札幌面を形成しました。

地名の由来はアイヌ語のピラ・ケシ・イ（崖の・尻の・ところ）で、その札幌面と平岸面の境界となる河岸段丘崖を指すものです。精進川下流に沿って水産総合研究センター水産研究所（旧孵化場・中の島2条2丁目）の下まで続いていて、山田秀三は「札幌のアイヌ地名を尋ねて」（昭和40年）でピラ・ケシ・イが旧孵化場の下手の辺だったと推測しています。

東側は約4万年前の支笏火山火砕流堆積からなる火山灰台地で、月寒台地とか平岸台地と呼ばれています。層厚は平岸霊園あたりで約70mあります。平岸4～5条11丁目のあたりに標高約64m～67mの通称坊主山と呼ばれる舌状に突き出た小さな丘がありました。ここには縄文中期から続縄文期以降の土器類が発掘され、竪穴住居跡2つが確認されています。また付近では珪砂を含む火山灰を昭和9年から約10年間、大日本麦酒製塩工場の主原料として採掘していました。現在近くに「ぼうず山公園」があり、その名残をとどめています。

平岸には明治4年に最も早い団体移民の一つとして伊達将一郎の家臣ら62戸203名が岩手県奥州市水沢から移住しました。平岸3条1丁目を北端に、南端は長専寺（平岸3条16丁目）の少し南まで平岸通に沿って東西に間口40間、奥行300間ずつに地割して、入植者はくじ引きで土地を選択しました。明治6年「北海道札幌之圖」には有珠新道（現平岸街道）沿いに約30戸の家屋と両側に開墾地があり平岸村と記載されています。

平岸は河岸段丘面上にあるため保水性に乏しく、開拓当初は住民が飲み水や使い水を毎日豊平川まで汲みに行かなければならず、用水の確保は開拓を進める上で緊急の課題でした。明治6年に開拓使に請願して測量が行われ村民全員の努力で平岸街道沿いに幅5mあまりの平岸掘割（用水）約5.3kmを40日ほどで完成させ、それにより農業用水も確保され周辺の開墾も進みました。

平岸街道はこの用水路を挟んで西側を上道（上側）、東側を下道（下側）と呼んでいました。明治9年に開設された真駒内牧牛場（後の種畜場）と札幌をつなぐ重要な道路だったため、西側は開拓使が管理していました。明治14年に明治天皇が行幸した際、西側は砂利を敷いて整備し、その後も何度か手直しが行われたため段々と高くなり馬車も往来できる立派な道路となりましたが、東側は村の管理だったため整備されず悪路のままだったので下道（下側）と呼ばれていました。

水沢からの入植者は、はじめ製網原料の麻を栽培したことから開墾地を「麻畑」と呼んでいましたが、明治5年に平岸村に改称され、昭和19年の字名改称まで平岸村字麻畑の地名が残っていました。

出身地の水沢周辺は昔から大麻が盛んに栽培され、平泉名産「陸中大麻」として有名でした。その品質の高さから漁網の原料として出荷され、東日本の漁村では圧倒的なシェアを誇り明治30年代の大麻生産量は岩手県が全国第2位でした。

水沢からの入植者の多くは士族でしたが、ほとんどは禄高平均が10石にも満たない奉公人前と呼ばれる貧しい生活で、農地を耕しながら生活を支えていました。その一つとして商品性の高い大麻も広く栽培されていました。そんな歴史もあり入植の際には、男が大麻を栽培し女には製網の仕事させようと計画していました。しかし、輸送条件が悪く生産した大麻の市場を確保することは困難でした。開拓使は移民の定住・定着をはかるために、まゆ、小麦などとともに大麻も開拓使が買い上げていましたが、その制度も明治7年には打ち切られてしまいます。もともと大麻栽培には地味が悪く入植者は苦戦を強いられていました。明治16年にはバツタの大群に襲われ、さらに樽前山の噴火による降灰の被害なども重なり生活は困窮し離村する者も多く出ました。

一方、明治8年に開拓使が1900本のリンゴの苗木を植えてからリンゴ栽培が活発となり平岸地域の農業を支えていくこととなります。病害虫に悩まされながらもリンゴ園は拡大を続け次第に「平岸リンゴ（札幌リンゴ）」の名で知られるようになります。明治15年ころからは東京などの市場にも出荷されるようになり、明治中期には全道生産量の80%を占めるようになりロシア沿海州やシンガポールなどにも輸出されています。

今では平岸の歴史の主人公がリンゴで大麻はすっかり歴史から忘れ去られたようでもあります。平岸小学校の校歌には「麻畑とよばれた むかし・・・」とありますし、平岸中学校の校章には大麻の葉がデザインされていて、わずかにその痕跡を残しています。

大正5年版地形図には美園小学校（平岸5条7丁目）のあたりに東裏の地名がありました。平岸東部から美園までのかなり広範な地域を指し昭和初期に設立された農事改良実行組合の名前にも使われています。ぼうず山公園と東山小学校との間を南北に「北海きたえーる」から平岸霊園まで走る道路に「東裏本通」の通称が残りその名残をとどめています。また地図にはありませんが平岸2条7丁目あたりに西裏の地名があって用水路がありました。入植当時につけられた地名でその由来は不明ですが、それぞれ平岸街道沿いの平岸本村の東西にあり、街道から奥行左右ともせいぜい100間くらいまでが耕地でその奥は未開の原野だったのでつけられたと考えられます。

この他に大正5年版地形図には平岸街道沿いの平岸3条10丁目あたりに平岸本村と記され、昭和初期には上本村と下本村の地名が農事実行組合名についていました。また現平岸中学校南東あたりの精進川河畔に冷水の地名も記載されています。地図に記載はありませんが、段丘崖を流れ落ちる小さな滝には「冷水の滝」とか精進川の語源となった「オソウシの滝」の地名もあって、いずれも現在は消えてしまった地名です。

昭和25年版地形図を見ると市街地はまだ形成されず平岸街道沿いに農家が分布する列村となっていて、街道の両側に果樹園が広がり、定山溪鉄道（現地下鉄南北線）の東側から美園一帯には広く水田が分布していました。

昭和33年に道内初の公団住宅「木の花団地」が建設され次第にリンゴ園は姿を消していきます。昭和36年に豊平町が札幌市へ編入され、38年には南大橋や南22条橋が完成し、都心までのバス路線も整備されていきます。札幌への人口集中が加速する中、昭和30年代後半ころから次第に宅地化が進展していきます。

昭和46年には地下鉄南北線が開通し平岸駅と南平岸駅（旧平岸霊園前駅）ができたことで澄川とともに一気に市街地化が加速し現在に至ります。平岸街道も次第に交通量が増加し真駒内方面へ抜ける幹線道路とし機能しています。昭和38年には用水路は埋め立てられ、和47年には中央分離帯が設置され道幅も拡張されました。現在も沿道には多くの商店や事業所が立地し、平岸の中心市街地を形成しています。

真駒内 柏丘 桜山 駒岡 種畜場にはじまる真駒内の歴史

真駒内は南区の北端にあり、南東部一帯は約4万年前の支笏火砕流堆積からなる丘陵地帯となっています。真駒内市街地はおおよそ1万年前にそこを旧豊平川が何度も流路を変えながら侵食して形成した氾濫原にあります。その後石山付近で河川争奪が起こり豊平川本流は西へ流路を変え、札幌扇状地の札幌面を形成しました。今は旧豊平川の氾濫原を真駒内川が流れ真駒内本町付近で豊平川に合流しています。

マク・オマ・ナイ（背後にある川の意）が語源で真駒内川が豊平川から見て石山や真駒内柏丘の丘陵の東側背後を流れていたのをついた地名と考えられます。明治2年の「高見沢権之丞・札幌之圖」にはマクマナ井道の記載があり、現豊平橋付近で千歳道とつながり近くに鉄一、対岸に茂八の記載があります。明治29年版地形図には現真駒内本町のあたりに真駒内とマコマナイ（真駒内川）、真駒内南町あたりにマクオマナイ（真駒内川）、それに精進川の地名が記載されているのみです。

真駒内の開拓は明治9年に開拓使が拓いた牧牛場に始まります。この年開拓使顧問ケプロンの要請で札幌官園に着任したエドウィン・ダンは直ちに札幌近郊に酪農やアメリカ農法を指導するための牧牛場（種畜場）を設営する場所を調査し真駒内を選定しました。明治15年に開拓使が廃止されるまでの6年間、牧牛場、牧羊場、養豚場建設と鶏、馬、ウサギ、ミンクなどの改良普及と家畜飼育の試験や実習指導が行われました。また牧草・ビート・亜麻の栽培、西洋農具の使用法の指導、さらにバター・チーズ・煉乳の製造やハム・ソーセージの加工指導も行っています。ダンは開拓使の廃止とともに真駒内を去りましたが、その功績をたたえ、昭和39年エドウィン・ダン顕彰会によってエドウィン・ダン記念公園内にダンの像と記念館（旧真駒内種畜場事務所）が設置されました。

大正12年には種畜場内にデンマーク人のモーテン・ラーセンが約15haの農場を上町5丁目から緑町5丁目あたりに開設し有畜農業の模範を示し家畜の改良なども手がけました。昭和20年にアメリカ軍が進駐しキャンプ・クロフォードが建設されました。真駒内のほぼ全域590万㎡が接収され、真駒内種畜場も70年に及ぶ歴史を閉じました。その間真駒内種畜場は北海道の酪農や畜産の礎を築いた試験農場として大きな役割を果たしてきました。

種畜場の痕跡は真駒内緑町緑道に残されています。明治12年にエドウィン・ダンの提案で掘削された真駒内用水路の跡で、沿道には現在は桜並木も整備されています。柏丘で真駒内川から取水し、現在は真駒内川右岸の公園から地上に現れエドウィン・ダン記念公園に流れて小さな池を作り、さらに曙公園を経て自衛隊真駒内駐屯地内に入り澄川西小学校付近で精進川に注ぐ全長約4kmの用水路で当初は深さ60cm、幅が90cmあり家畜の飲料水や水車動力、農機具の洗浄などに利用されました。その後、精進川を介して平岸用水へ間接的に水を提供する機能を果たし広範な地域への農業用水供給に寄与しました。

またこの他にも種畜場が北海道開拓の重要な開発拠点だったことから、歴代の天皇が視察しています。曙町の真駒内第一公園内に明治14年の明治天皇行幸道路の碑や明治44年大正天皇が東宮（皇太子）時代に視察して天皇即位を記念した大典記念碑があります。また昭和天皇も昭和11年の陸軍特別大演習で行幸したときに種畜場を視察し上町3丁目^{ぼけんだい}に第三御野立所と馬見台があったと記録されています。

キャンプ・クロフォードは昭和30年から順次返還され、北側半分は陸上自衛隊駐屯地となり、ゴルフ場だった南西側には昭和47年の冬季オリンピック大会のメイン会場となった真駒内公園がつけられました。そして、その東側に34年から市街化地域165.3haの土地区画整理事業が実施され、

道営真駒内団地の造成がはじまりました。当時は大阪千里ニュータウンに次ぐ大規模な近代的住宅団地造成と話題になり、特に上下水道整備により水洗トイレが完備されたモダンな団地生活は若い世代のあこがれともなり、札幌近郊の代表的ベッドタウンとして大きく変貌しました。

その後、市営本町団地、あけぼの団地、緑町団地などが造成され、昭和 47 年の冬季オリンピック大会では地下鉄真駒内駅周辺（緑町）に男子選手村が設営され、大会後は日本住宅公団（現都市再生機構）が増築をして 22 棟 830 戸の五輪団地も完成しました。道営の真駒内団地は 2016 年に 45 棟、1174 戸ありましたが建築から 60 年以上経過して老朽化のため 2019 年に 15 棟 210 戸が廃止されました。地区人口も昭和 46 年の 34000 人をピークに減少を続け、2019 年には約 25000 人が居住しています。

真駒内の主要市街地には現在真駒内本町、上町、曙町、東町、緑町、幸町、泉町、南町の行政地名があります。かつては通称地名も多くあり、本町もかつては下町の通称地名でしたが団地造成のころには元町とも呼ばれ、昭和 36 年に札幌市に編入と同時に住民の要望から本町となりました。そのほか、西町、桜町などの通称地名もありました。

中心市街は昭和 30 年代初頭から本町の真駒内通沿道に形成され、小規模な各種小売店や料飲店、事業所などが集積しました。昭和 47 年に区制が施行され真駒内駅前通りの幸町に南区役所、消防署、保健所などのほかスーパーマーケットや金融機関なども立地し南区行政の中心となりました。

真駒内^{かしわおか}柏丘は豊平川と真駒内川の合流地点から石山陸橋まで続く標高約 150m ほどの火山性丘陵で縄文遺跡も発見されています。かつては種畜場の採草地で薪炭林としても利用され、昭和 26 年に入植した人たちが柏の木が多くあったことから柏ヶ丘と呼ぶようになりました。

明治 12 年にダンがブドウ栽培をしたところは通称ブドウ園と呼ばれていました。また戦後満州から引き揚げてきた東海林諭吉が入植しましたが老齢で酪農経営が困難となり簡易温室を設け、生花、盆栽の販売を始めたことから真駒内^{かえん}花園と呼ばれるようになり、現在も柏丘 9 丁目に真駒内花園のバス停があります。

オリンピックの時にはプレスセンターが建設され現在北海道青少年会館コンパスとして利用され、プレスマンハウスは柏ヶ丘五輪団地となりました。その後宅地が進行し平成期にはほぼ一帯が市街地化されました。

桜山は真駒内に隣接する澄川にある通称地名ですが、一般的には真駒内の一部と考えられています。地下鉄真駒内駅東側の精進川右岸にある丘陵で真駒内種畜場の一部でした。

エゾヤマザクラが多く自生し春には白い花が咲き乱れ牧草の緑に映えて美しかったことから桜山と呼ばれるようになりました。昭和 4 年に現地下鉄南北線を走っていた定山溪鉄道が桜山を沿線にある桜の景勝地として宣伝し、一時花見客で賑わうようになりました。

戦後はアメリカ進駐軍に接収され、ガソリン集積場や射撃場となり桜の景勝地としての面影は失われてしまいました。

昭和 34 年に始まる真駒内団地造成計画は桜山地区にも及びましたが、市民が結成した桜山保勝会の運動などにより造成計画は中止となりました。総面積 135ha の桜山は保健保安林ならびに鳥獣保護区に指定され、現在は有料の私設紅桜公園となり、園内には飲食施設やジンの蒸留所などがあります。

駒岡は真駒内の南端にあり、真駒内種畜場の放牧地でした。戦後米軍の演習地として接収されましたが昭和 22 年に米軍から未墾地開拓の許可が出て、真駒内開拓団として満州からの引揚者 16 戸と東京から疎開した 18 戸が入植しました。精進川上流部にあり、うっそうとした原野が広がりクマ

ザサやネマガリダケなどが生い茂っていました。開拓団は真駒内のほか西岡や滝野など5部落に入植し約1600町歩をほぼ2年で開墾しました。

昭和24年に開校した小学校に真駒内の「駒」と西岡の「岡」をとり駒岡小学校とし地名も駒岡と改称しました。現在駒岡清掃工場があり、近くに市の保養センターがあります。南西部には陸上自衛隊弾薬庫があり駐屯地となっています。平成中期には南部の石山東から常盤の東側には駒岡団地も造成されました。

石山 札幌軟石が育んだ石材のまち

石山周辺については松浦日誌にはヲコシナイとあり、松浦図にはヲコシと表記されています。語源について永田地名解では「ウコッ シリネイ 接近ノ地 「マコマナイ」ト札幌川ト相接近スル處ノ地」と解説されています。

札幌軟石の呼び名で知られる約4万年前に形成された支笏溶結凝灰岩の丘陵が石山陸橋のあたりで豊平川の河川争奪によって豊平川本流と真駒内川の二つの川に挟まれて馬の背のように丘が残されたことからこの地名がついたと考えられます。現在は石山川（かつての穴の川本流）が流れ石山北端で豊平川に合流します。当初は穴の澤と呼ばれていて、大正5年版地形図にもオカバルシ川が豊平川に合流するあたりに穴の澤の地名が記されています。昭和19年の字名改正までは石山周辺に穴ノ澤、穴ノ川尻、穴ノ川沿、穴の川口などの字地名がありました。現在穴の沢の地名はなく穴の川となっています。穴の川は藤野富士の東山麓から藻南橋の上流で豊平川に合流する流長7.3kmの河川です。元の川口は藻南公園ありましたが、石山2条4丁目から分かれる穴の川放水路が石山大橋の上流で豊平川に流入しています。

石山の地名は明治4年に来日したお雇い外国人で測量や地質調査にかかわったワーフィールドと化学者で鉱山技師でもあったアンチセルが翌5年に石山で軟石を発見しました。

明治8年から大岡助右衛門が工事を請け負い、当時穴の沢と呼ばれていた現在の石山陸橋のあたりに5棟の小屋を建て本格的な採掘をはじめました。大岡は幕末から開拓期に請負師として建設業で活躍し、箱館五稜郭や札幌草創期の豊平館、琴似、山鼻などの屯田兵屋建設、幌内鉄道の敷設工事なども請け負った人物です。

開拓使は札幌本府建設にあたって石材を利用した洋風建築を多く採用しました。軟石は比較的採掘が容易で加工しやすく断熱性にも優れていることから、採掘の当初から建築用材として多くの需要があり、明治8年の採掘量が2万個だったものが14年には5万7千個と急増し、そのころから石山とか石切山の地名が定着しました。大正7年に開業した定山溪鉄道の駅名が石切山駅でしたので古い市民には、そちらの方になじみがある人もいます。昭和19年の字名改正により周辺は石山となり、現在は南区石山と石山東が行政地名となっています。

札幌の都市的発展に伴って札幌軟石の需要は増大し大正から昭和にかけての最盛期には年産30万個となり、石材店も100軒を超え石工も300人を数え石山は石材工業の発展で賑わいました。札幌軟石を利用した建築物は小樽運河倉庫群や札幌市内では札幌資料館(旧控訴院)、ぽすとかん(旧石山郵便局)、日本キリスト教団札幌教会などが現存し、犬山市の明治村に移設した電話交換局などはその代表的な建造物です。

しかし大正期に入るとコンクリートが普及しはじめ、成型加工が容易で様々な用途に利用でき、さらに低価格であったことから建材需要で軟石を圧倒するようになりました。昭和30年代に入ると

手掘りからチェーンソーによる機械掘りに変わり、石工の数が減少していきます。戦前まで隆盛を誇っていた石材業も戦後は急激に衰退し、現在採石を続けている石材店は常盤方面に残る1社のみとなりました。かつての砕石場跡は石山緑地の一部として整備され、ギリシャの古代遺跡を思わせる芸術性の高い造園で市民にも高い人気があります。

この他にも国道230号には石山通の通称があります。かつては本願寺道路と呼ばれ明治3年に山鼻から中の沢まで東本願寺の僧たちが開削した幅約1m、約4kmの道路が前身で、明治8年に山鼻屯田兵村が設営されると同時に札幌本府とを結ぶ幹線道路として整備されました。石山通の呼び名は明治5年に発足別（現川沿の硬石山）で硬石の砕石が始まり、8年には穴の澤（現石山）で軟石の採石が始まりました。これらの石材を札幌本府建設の資材として運搬するために山鼻村から真駒内を経由して石山までの直線の馬車道が開かれ、そのころから石山通の呼び名が定着しました。明治43年には民営の石材馬車鉄道が現在の石山緑地のあたりから硬石山付近で豊平川を渡り、石山通を北上して札幌市街地まで開業しました。大正7年の北海道大博覧会を前に路面電車化の工事が始まり石山通の軌道は撤去されましたが、市街地の路線のほとんどが市電のルートとして残りました。

石山通は高度経済成長期に自動車交通量が飛躍的に増大し、市内を南北に走る幹線道路として重要な機能を果たすようになり現在も石山通の呼び名は広く市民に定着しています。

藤野 オカバルシ川にはじまる藤野の歴史

藤野は南区石山と簾舞に挟まれた国道230号沿いの地域です。市街地をオカバルシ川、藤野沢川、野々沢川、東野々沢川が流れ豊平川に流入しています。

藤野の歴史はオカバルシ川流域に始まります。ここには複数の縄文遺跡があって土器、石器などが発掘されています。またアイヌ語地名がついていることからアイヌの人たちの生活の場であったことも確かです。

「永田アイヌ語地名解」には「川尻ノ磯礁」と記され、「知里アイヌ語辞典」でも「オは川尻、カバルシを水中の平岩（後略）」と説明しています。宮坂省吾は「札幌の地名」で「470万年前にできた硬石山の火山岩が河床に現れている様子（後略）」と説明しています。

オカバルシ川は藤野の焼山（663m）の南側にある真簾峠北斜面に源流部があり、藤野富士（651m）と豊見山（579m）の間を北流し藤野と石山の境界あたりで豊平川に合流する全長6.3kmの川で平成27年版地形図にもその地名が記載され、カタカナ表記で残る貴重なアイヌ語地名の一つです。

江戸中期の「石狩山伐木図」（1752～69）にはヲカバロシ川と記され、「松浦日誌」にもヲカハルシの記載があります。このほかヲカバルシ、ヲカバルシ、オカバルシ、オカハルシ、オカバロシなどと様々な表記が残っていて、オカバルシ川流域を指す地名でした。

昭和19年の字地名改正まで豊平町平岸村大字藤野の字地名にもオカバルシ川沿、オカバルシ川上、簾舞ヲカバルシ川上流がありました。

オカバルシ川はかつて丸重吾の沢と呼ばれ、今もオカバルシ川にかかる国道230号に丸重吾橋の名前が残っています。

6代目阿部屋村山伝兵衛が幕末期からこの流域に入り、船材用にトド松などを伐採していました。それをオカバルシ川から切り出し大正2年まで豊平川を筏を組んで流送していました。そのとき盗難防止のためにまるじゅうご（○に十五）の店印を焼き付けて切出していたので、だれかれとなく丸重吾の沢と呼ぶようになりました。

阿部屋は江戸期に隆盛を誇っていた豪商で宗谷、苫前、留萌、石狩などの場所経営も任され回漕業を営んでいました。丸重吾の店印は初代阿部屋村山伝兵衛が船を 15 隻持てるまでになりたいという願望からつけたといえます。

明治 4 年に本願寺道路（現国道 230 号）が開通し、西に隣接する簾舞に通行屋が置かれていましたが周辺の本格的な開拓は後のこととなります。

最初の入植者は明治 16 年にまるせん（〇に千）の屋号をもつ、岩手県出身の松沢松之助でした。簾舞通行屋の屋守を命じられていた黒岩清五郎の東隣りとなる下野ノ澤、現在札幌藤野神社のあるあたりに入植しました。神社への坂道には「まる千坂」の地名が残っています。すぐに同郷の中向吉五郎ほか数戸を呼び寄せて開墾を進め、明治 20 年ころには小さな集落ができたといえます。

現国道 230 号沿いの藤野市街地域は山鼻や篠路屯田兵村に給与された追給地や増給地だったため、しばらくは一般の人たちが入植することができませんでした。明治 20 年ころから屯田兵が通い作をするようになり、牧草や大麻が植えられましたが多くは未開のままでした。

明治 16 年ころから屯田兵村の給与地ではないオカバルシ川や野々沢川流域にも入植者が移住するようになりましたが、開墾が進むまでは造材や製炭で生計をたてていました。明治 40 年ころから給与地の払い下げを受けた入植者も増え、水田や牧場が拓かれホップや果樹の栽培も行われました。大正から昭和初期にかけては蔬菜などの産地として発展し、リンゴやイチゴなどの果樹栽培も広がりました。

藤野の地名は大正 7 年に定山溪鉄道が開通して現在の藤野 2 条 2 丁目に藤ノ沢駅が開業しました。駅名は線路の敷地を寄付した加藤岩吉と小沢清之助両人の一字をあてて藤ノ沢としたものです。昭和 4 年の字名改正で字地名も丸重吾ノ沢から藤ノ沢となりました。

さらに昭和 19 年字名改正で藤ノ沢地区と西側の藤野沢川、野々沢川、東・西野々沢川各流域を含む野々沢地区一帯を併せて一文字ずつとって藤野と改称しました。

昭和 30 年代には国道が舗装され 32 年に北海道住宅供給公社が造成した下藤野団地を皮切りに宅地化が進みました。民間資本による活発な宅地造成もあり周辺の果樹園などは次第に宅地化されていきます。札幌市街地図（昭和 42 年）には農地の中に藤ノ沢田園住宅の記載があり、当時の新興住宅地域の面影を知ることができます。平成初期には国道を中心に豊平川右岸から南部丘陵地までほぼ市街地化され、国道沿いには大型商業施設や金融機関などが立地し地域の中心的機能を果たしています。

藤野の代表的行楽地に十五島公園があります。藤野の豊平川右岸にある広さ 2.4ha の都市公園・近隣公園で昭和 29 年に定山溪鉄道株式会社・藤の沢観光協会が造成し、昭和 51 年に札幌市へ移管されました。

かつては定山溪鉄道藤ノ沢駅から近く、夏季から紅葉の美しい秋にかけて河畔は炊事遠足の場として多くの市民が集う場所となりました。多くの小中学校が炊事遠足で利用していたので札幌市民にとってはなじみの深い公園の 1 つです。今も駐車場が整備され、炊事広場や芝生広場、児童遊具のある遊戯広場などがあります。

地名の由来は、大正初期まで川の中に多くの岩が島のように点在していたからで、かつては岩伝いに牛を運んだとの記録が残っています。また豊平町史には「この地に入植していた藤原義惣治の家のことを入植者葛巻善次郎が「十五島」と呼んだのが始まり」と解説しています。その後、木材流送の障害になるので発破をするなどして取り除いたようです。

昭和 48 年に砥山ダム・藻岩ダムの放流による急激な増水で川中に取り残された中学生 2 名が犠

牲となる水難事故が発生し、園内には慰霊碑が建てられています。

また白川橋というつり橋があり対岸の果樹園の多い白川地区に渡ることができますが、この橋のあたりは地質学的に大変興味深い場所で札幌の自然観察の定番コースの一つとなっています。つり橋から上流 60m くらいのところに朝里層群と呼ばれる泥岩層に新第三紀中新世末に硬石山から続く「デイサイト」という火成岩が貫入した現場があり、その接触部が川を横切っています。川中にごつごつと岩が多く残っているところがデイサイトの部分です。これと接触している上流側 10 数m の泥岩（ケツ岩状）は高熱により灰色～灰青～黒色に変色し、その接触線数 10 cm 以内では強烈な熱による接触変成で表面の割れ目が細かく角張ったように変質しているのが観察できます。札幌を舞台に繰り広げられた地球の壮大な歴史を垣間見ることができる楽しい場所です。

冬はスキーを楽しむこともできます。昭和 38 年に豊栄山の北側斜面に藤野ヘルスランド国際スキー場という本格的スキー場が開設され、現在は札幌市が所有し札幌リゾート開発公社が営業を続けています。41 年に札幌オリンピックの開催が決まると、その東側にリュージュ競技の練習コースが建設され、ここで練習を重ねた藤野在住の大高優子がオリンピックで 5 位入賞を果たし大きな話題となりました。

常盤 芸術の森 木材切り出し基地の土場から芸術の発信基地へ

南区常盤、芸術の森や石山東は真駒内川流域にありかつては土場という地名でした。望豊台と呼ばれた真駒内柏丘の丘陵南端部から小さな谷を挟んで南側の地域になります。

この谷は約 1 万年前に豊平川本流の流路が変わる河川争奪が起こったところで、現在石山高架橋のかかっている場所です。かつてはここに定山溪鉄道の上を跨ぐ石山陸橋があったことから、今もバス停に石山陸橋の名前が残っています。

むかし豊平川は真駒内柏丘東側の真駒内川の流路を流れていて、その時に侵食した小さな谷が石山と真駒内柏丘を分断しています。そこから北へは峠のような上りになっていて、上からは豊平川を一望できたことから望豊台と呼ばれました。

明治 9 年に札幌本府まで札幌軟石を運ぶ馬車道が開かれ、中でもこの場所はかなりの急勾配だったので頂上で馬車をここで交代したといえます。

土場は真駒内川上流から流送されてくる原木を集積した場所で明治 35、6 年ころから札幌に木材を供給していました。真駒内川は流量も少なく不安定だったので、川の数か所をせき止めて水をためて原木を流し集めて、それから堰を破って次の堰まで一気に流すという方法でした。最後の堰が引き揚げ場となり原木が山のように積まれていました。

昭和 25 年版地形図には石山東 3 丁目のあたりと常盤 6 条（常盤小学校のあたり）の 2 か所に土場の地名が記載されています。

昭和 19 年の字名改正で周辺に常盤木（トドマツなどの常緑樹）の森林が多かったことから常盤に改正され、市立常盤小学校もそれまでは土場小学校の校名でした。

開拓の始まりは明治 31 年に付近に苗穂監獄の分監が設置されてからです。石山東の南端に架かる常盤 1 号橋にはかつて監獄橋の呼び名もありました。33 年までのわずか 2 年間でしたが一帯の約 50ha が監獄用地とされ、5 名の看守の監視のもと 30 名の囚人たちが主として未墾地の開拓に従事しました。しかし逃亡者が続出するなどの経緯もあって、その後樺戸監獄に移されたということです。跡地は当時の典獄（刑務所長）高津八郎が払い下げを受けて高津農場を拓きました。

明治 34 年に農場の支配人だった中川千吉が譲り受け、郷里の石川県から 5 世帯を呼び寄せ開拓を始めました。その後 10 数戸が入植しましたが生活が苦しく開墾作業のかたわら、採石場の人夫や伐採や造材作業などで生計を維持していました。

明治 40 年ころ石山から常盤神社の下までトロッコレールが敷かれ軟石の切り出しが行われました。大正 2 年にレールは撤去されて常盤道路（国道 453 号札幌支笏湖線）となりましたが、現在も市内で唯一の札幌軟石の砕石場が常盤神社の少し北側に残っています。

大正から昭和の時代にかけて牧場が拓かれてめん羊や牛の飼育が行われたり、昭和 25 年版地形図を見ると真駒内川沿いに水田も多く分布しています。

昭和 20 年戦災による東京からの疎開入植や戦後は外地引揚者の入植者があって人口も急増し、野菜やリンゴなどの栽培も行われるようになり次第に多角的な都市近郊型の農業に変化していきました。

昭和 47 年に札幌オリンピック開催に合わせて常盤道路が舗装され、近年は住宅地として発展しています。現在は真駒内川右岸地域がほとんど市街地化され、平成期に入り東側丘陵地にも小規模な住宅団地が民間資本によって造成されました。

平成 5 年に真駒内国道とも呼ばれる国道 453 号札幌支笏湖線に昇格し支笏湖、洞爺湖を經由して伊達市まで続いています。これに併走する支笏湖畔までのサイクリング道路は人気が高く多くの人たちがサイクリングを楽しんでいます。

芸術の森は真駒内川左岸に広がる緑豊かな丘陵地にあり、平成 2 年に石山、常盤両区から分離して行政地名となりました。地域内に札幌芸術の森、平成 18 年に開校した市立高等専門学校を前身とする市立大学芸術の森キャンパスがあります。また札幌アートヴィレッジという芸術と情報技術を融合させたハイテク産業の振興を目的とする産業団地が造成されています。現在は 3 社の進出に留まっていますが今後の発展が期待されています。

札幌芸術の森が地域の中心施設で、昭和 52 年に札幌商工会議所が提唱した「さっぽろアートパーク構想」に端を発する北方の新しい芸術・文化の創造を目的とした複合芸術文化施設となっています。平成 11 年に全面開園し一年を通じて様々なアートイベントが開催され、敷地内に国内外の彫刻作品を常設展示する野外美術館や企画展を開催する札幌芸術の森美術館や工芸館などがあります。

篠路 幕末からはじまる開拓の歴史

篠路は札幌北部から北東部に広がる広範な地域をさし、現在は北区篠路、篠路町篠路、篠路町上篠路、篠路町拓北、篠路町太平、篠路町福移の行政地名があります。

江戸寛政年間（1789～1801）の記録にはイシカリ十三場所に上シノロと下シノロ場所があります。いずれもフシコサッポロ川（現伏籠川）の中流域がシノロ川と呼ばれていて、ここがシノロ場所だったと考えられます。

「札幌郡西部図」（明治 6 年）にはフシコサッポロ川（現伏籠川）と旧石狩川（茨戸川）の合流点にシノロプト（シノロ川口の意）と記載されています。

地名の由来は不明ですが「篠路村史」（昭和 30 年）には、スウォロ「鍋を浸しておく所」が語源で、ここで炊事に使う鍋を川に浸しておいたことからついたと説明しています。

1855（安政 2）年に幕府はロシア南下政策に対応する北辺警備のため西蝦夷地を幕府直轄としました。この年幕命を受けた荒井金助は従者 12 名とともにここへ移住し、篠路村開村の基となりました。

た。このとき江戸若宮八幡の分霊を氏神とした若宮八幡を創祀し、1857（安政 4）年には篠路八幡宮として社殿を造営し現在の篠路神社となりました。

荒井は1857（安政 4）年に箱館奉行堀利熙^{ほりとしひろ}に取り立てられ石狩役所調役を命じられ、シノロ場所は1858（安政 5）年に箱館奉行の直轄となります。この年、農家 8 戸を入植させ開墾の端緒を拓いています。本格的な開墾は1860（万延元・安政 6）年に始まります。すでにケネウシベツ川（琴似川）付近に入植し米作にも成功していた早山清太郎^{そうやま}をリーダーに荒井金助が私費を投じて農家十数軒、50 人を募り入植しました。最初は荒井村（上荒井村・下荒井村）と称し、これが篠路村（本村）の前身となりました。慶応 3 年（1867）まではシノロの地名で局地的に荒井村と呼んでいたようです。

また、早山清太郎はそれに先立ち1859（万延元・安政 6）年に星置かハツシヤブ（発寒）の二説がありますが、そこ入植していた在住の中島彦左衛門らを荒井村の南西に隣接した当時上荒井村の村域、現在の篠路町太平あたりに入植してもらい中島村を開きました。その後中島は明治 2 年にここを去り、中島村は篠路村に併入されています。「大正 5 年版地形図」にはこのあたりに中島の地名と中島橋が記載され、その名残をとどめています。

篠路村が成立した年は不確実で「札幌区史」（明治 44 年）には明治 2 年、「篠路村史」には明治 4 年とあり上篠路村、下篠路村、中島村、荒井村を合わせて篠路村となっています。明治 3 年の開拓使事業報告には戸数 32 戸、人口 101 人とあります。

早くから入植者が入ったのは上篠路の地域でした。「昭和 25 年版地形図」には篠路本村の南東側、伏籠川右岸に五ノ戸とその南隣に上篠路と十軒の地名があります。

五ノ戸の地名由来は最初に入植したのが 5 戸だったからとも青森県五ノ戸から移住したからだともいわれていますが不明です。十軒は明治 4 年 5 月に旧南部藩士 10 戸が入植したのが始まりです。五ノ戸も十軒も現在は消滅してしまった地名ですが、昭和 12 年までは字地名として使われていました。かろうじて篠路 3 条 10 丁目に「篠路五ノ戸の森緑地」とその南に「十軒神社」や「十軒こまどり団地」などがありその名残をとどめています。

明治 10 年代に入ると各地への入植が活発となり、山田開墾（後の山口開墾・現篠路町拓北）、篠路烈々布^{れつれつぷ}（現篠路町太平）、興産社（現篠路町拓北）、当別太（現篠路町福移）の部落が形成されました。

山田開墾は明治 13 年に山口県の旧長州藩士、山田顕義が篠路町拓北山口地区に 140 町歩の土地の払い下げを受け、同郷出身の開拓者 3 戸、明治 15 年にさらに 5 戸が移住して開墾事業にあたりました。山田は 41 歳で司法大臣を務めた明治政府の要人で当初は農場主の名前から山田農場とか山田開墾と呼ばれていました。山田は明治 15 年に開墾地のほとんどを当時南 1 条西 2 丁目で荒物雑貨商を営んでいた佐藤金治に 8000 円で売却し、その後佐藤農場として小作人を募り開拓を進めていきました。「札幌支庁管内案内図」（大正 4 年）にも佐藤農場の地名が記載されていましたが、佐藤は大正 13 年に農地を低額で小作人に解放し佐藤農場に終止符を打っています。しかし開墾以来山口県からの入植者が多く農場を支えてきたので山口開墾と呼ばれ地域の通称地名として山口が定着しました。

篠路烈々布には、明治 14 年に福岡県人による報国社の一団が来て、そのうち数戸が 16 年に現在の百合が原地区に入植して篠路烈々布の開基となりました。現在百合が原公園の北端に篠路烈々布郷土資料館があり開基百年記念碑が残されています。

さらに篠路烈々布北西部に明治 22 年、徳島と和歌山から数戸の入植者が入り篠路太平の開基とされ、

太平公園（太平 12 条 3 丁目）南端の一角に太平開基百年碑が残されています。

興産社は明治 14 年に徳島県の滝本五郎、その実弟阿部興人らによって設立された開墾会社で 15 年に大規模農業開拓を夢見て現在のあいの里から拓北の地域に入植しました。「大正 5 年版地形図」には興産社地内の地名が記されています。現在も町内会名や興産社大野地通、興産社中央（バス停名）などに地名が残っています。

藍の栽培が盛んに行われ、明治 18 年には徳島県から藍加工の技術者を雇い入れ、藍染めの原料となるすくもの加工にも成功し藍玉（すくものを突き固めたもの）製造所を設置し自前で藍の加工をはじめました。当時藍は商品性が高く、1 年の生活費が 30 円ほどだった時代に 1ha あたり葉の生産だけで 70 円以上の収入が得られました。明治 19 年には篠路興産社株式会社を設立し、藍生産が本格化し、まさにあいの里となりました。しかし、明治 30 年代に入るところには化学染料が台頭し藍栽培は衰退します。「興産社」は明治 30 年に藍栽培を停止して畑作へ転換しますが、明治 32 年に解散しています。

一帯は北海道拓殖銀行の社有地となり昭和 12 年に山口を除く興産社、釜谷臼、大野地は拓殖精神を強調する意味も込めて拓北と改称されました。

福移には明治 15 年、生活に困窮していた筑前（福岡県）の士族救済を目的に北海道移住が勧められ、農商務省から 60 戸分 12000 円の資金貸与を受けて福本誠をリーダーに「北海道移住開墾社」が組織され士族 51 戸、175 名がこの地に入植し筑前開墾と呼ばれました。

もともとは石狩川左岸にあり当別太の地名でした。語源は「ト・ペツ・プト」（沼のような川の口の意）で石狩川がここで鋭く湾曲し篠路側の岸が半島のように突出し、そのちょうど対岸に当別川の川口がありました。石狩川右岸の當別村にも篠路村上當別太の対岸に下當別太、さらにその上流にも上當別太の地名がありました。

昭和 12 年に篠路村字名改正でここは篠路村福移となりました。當別村に同名の地名があり、それとの混同を避けるためと福岡から移住してきた筑前開墾の歴史を残すために福移の地名にしたものです。同時に篠路村は篠路、太平、上篠路、拓北、中野、茨戸の福移も含めて 7 つの字名に整理されました。

それまでは「篠路」には札幌太とキウス、本村、横新道、興産社、「太平」にはフレップ、烈々布、学田、「上篠路」には十軒、五ノ戸、「拓北」には山田開墾、山口、釜谷臼、ペケレトシカ、大野地、興産社、「福移」には当別太、下福移、中福移、上福移、「中野」には沼ノ端、「茨戸」には茨戸太、上茨戸、下茨戸の地名がありましたがそのほとんどは一部を残して消えてしまいました。そのそれぞれに篠路の自然環境や歴史を探る手掛かりがあり興味深いものです。現在は北区篠路、篠路町篠路、篠路町上篠路、篠路町拓北、篠路町太平、篠路町福移のほかに屯田、屯田町、東茨戸、西茨戸、あいの里、南あいの里、百合が原、百合が原公園、そして東区に中沼、中沼町、中沼西の行政地名があります。

清田 清らかな水田地帯の願いを込めて

もともと厚別本通^{あしりべつ}といったところで、昭和 19 年の字名改正の際、国道 36 号線沿いの中で一番水田の美しいところから、最初は豊平の豊をとって豊田の地名を考えたという。しかし同名の地名もあり美しい清らかな水田地帯という意味で清田とした。最初の入植は明治 6 年であったが、他の多くは団体移民の開墾であったのに、この地区は個別の開拓という状態が続いた。本格的な開拓は明

治 20 年代で厚別川と数多いその支流とともに開拓が進められたとあっていいほど、その川の流れと深い関係にあった。昭和 30 年ころまで米作り農村として栄えていたが国道 36 号の舗装と拡幅整備、さらに札幌市との合併によって、のどかな農村から住宅、工場が立ち並ぶにぎやかな街に変容した。新栄はもともと厚別南通^{あしりべつ}といったあたりであるが、昭和 19 年の字名改正で、土地の人々はこの土地が神仏の恵みで栄えるようにとの願いから真恵（しんえ）にしようとしたが、改めて繁栄の意味を込めて真栄とした。ここは旧厚別、厚別南通が主で三里塚、器械場、厚別川沿、焼山、厚別西山、厚別焼山などが含まれている。その昔は丘続きだったが、長い間の厚別川の浸食で掘り下げられた土地である。石器や土器が水田の中から発見されることから先住民族が生活していたと思われる。戦前戦後を通じて豊かな水田地帯で米作農業が栄えてきたが、札幌市との合併後、国道の舗装、拡幅がなり住宅団地が造成され水田も減少した。

清田区は平成 9 年に豊平区から分区して誕生した。区内には清田、北野、真栄、平岡、平岡公園、平岡公園東、里塚、里塚緑ヶ丘、有明、美しが丘の 10 地区の行政地名があります。

大字月寒村に属したこの地域は国道 36 号沿いに集落が点在し厚別川沿いの低地に水田、その周辺の丘陵地に畑、南部には広大な山林が広がっていた。昭和 30 年代後半から清田・北野地区の宅地化が本格的に始まり、平岡・里塚・真栄地区へと拡大したが有明地区には市街化調整区域に指定された広大な市有林があり宅地化は進まなかった。昭和 36 年に国道 36 号の切り替えや羊ヶ丘通の開通で交通アクセスが向上し、昭和 49 年に札幌市が札幌東部地域開発計画を策定したことから、里塚・平岡地区の農地、山林、牧場などで土地開発業者による計画的かつ大規模な宅地造成が行われた。さらに地下鉄東西線の南郷 18 丁目駅、大谷地駅、地下鉄東豊線の福住駅を起点にバス路線網が整備され宅地が加速した。

厚別橋の近くに駅通所があった。また長岡重治がこの地域で最初に水稻栽培を試みた。長岡は学校や神社を建てるなど厚別の開拓に尽力した。昭和 30 年代後半に民間企業による清田団地の造成が始まり、現在は南側の丘陵地にまで宅地が広がり 36 号線沿いには様々な商業施設や病院などが並び清田区の中心地となっている。

しらはたやま

白旗山 と有明 白旗山は「有明」の歴史の原点

白旗山は有明にある標高 321.5m の山です。約 500～258 万年前のデイサイト（白旗山溶岩）からできていて、山頂は平らで広く頂上からの眺望もよく市民から親しまれています。

地名は明治 20 年代後半に篠路屯田兵村に有明の土地約 8 万 9 千坪が*56 公有地として給付され、測量の際にこの山に白い測量旗を立てて基点としたことに由来します。現在も山頂に三角点の標柱があります。

実際には付近の小作農家が開拓を行ったようですが大正 7 年ころに払い下げられ、周辺は公有地と呼ばれ「大正 5 年版地形図」にもその地名が記載されています。正式に昭和 19 年に公有地の有の字を生かし豊平町有明と命名しました。地区内の有明小学校や有明神社もそれぞれ公有地小学校、公有地神社の名称でした。白旗山はそうした有明の歴史の原点となる場所といえます。

白旗山には西岡コースと真栄コースの二つの登山コースがあり、西岡コースには小川や湿地もあり多様な植物が観察できます。山麓はシラカバ、サクラ、コブシ、ミズナラなどが森をつくり、市が造林したカラマツ林もあって白旗山都市環境林となっています。西側山麓は自然観察の森、北東側には札幌ふれあいの森が広がり散策路が整備されキャンプ場などもあり、冬季間には歩くスキー

を楽しむこともできます。また厚別川を挟んで南東側には有明の滝自然探勝の森があって、約 6km の散策路に沿って有明の滝（落差 13m）や有明小滝（落差 5m）を見ることができます。

昭和 47 年の札幌オリンピックで使用された真駒内距離競技場に代わる国際スキー連盟の公認コースとして平成 2 年に白旗山北東斜面を中心に起伏に富んだ全長 25km のコースが完成しました。発着場は夏季には天然芝の白旗山サッカー場として活用されています。

里塚 本当は三里塚でした。

幕末に箱館奉行所は恵比須屋、阿部屋、山田屋の場所請負人に分担させて太平洋岸の勇払から札幌を経由して銭函まで札幌（千歳）越新道（現国道 36 号）を開削しました。この道が大友堀と交差する創成橋（南 1 条西 1 丁目）を起点に里程標を設置しました。創成橋には「北海道里程元標」と「札幌建設の地」記念碑があり、ここが札幌本府建設の原点となったことを示しています。

里塚はここから三里（約 12 km）の場所に位置し三里塚の標柱が立てられたところです。昭和 19 年に豊平町の字名改称で里塚となりましたが現在も三里塚小学校、三里塚神社、三里塚公園や厚別川に合流する三里川などにその地名が残っています。その東側、北広島市大曲には四里塚公園の地名も残っています。

「大正 5 年版地形図」には国道 36 号がラウネナイ川と交差する月寒東 1 条 18 丁目に二里塚と里塚 2 条 6 丁目に三里塚の地名があり、それぞれの北側に二里塚北通と三里塚北通の記載もあります。

「昭和 25 年版地形図」になると二里塚の地名は消え三里塚のほか新たに里塚緑ヶ丘のあたりに里塚の地名があります。

里塚は標高 80m ほどの月寒台地上にあり、うっそうとした森林に覆われていました。開拓は明治 8 年に月寒から高屋寿太郎が入植したのが最初ですが、すぐに定住したのではなく炭焼きなどをしていました。明治 20 年代になると田中重次郎、西国三郎など高屋寿太郎も含めて 5 戸が入植し、エンバク、豆類などの畑作が行われました。大正期には戸数も 34 戸に増えてりんご栽培も始まります。昭和 22、23 年に里塚東部農業開拓団 27 戸が南里塚（現里塚霊園あたり）に入植し人口は一気に倍増しましたが、それでも昭和 30 年代までは約 70 戸、340 人ほどの小さな集落で、畑作やりんご栽培のほか三里川沿いには若干の水田も分布していました。

昭和 41 年に市営里塚霊園約 66ha が開設され、このころから次第に宅地化すすみ、まず民間ディベロッパーによる日の丸団地や桂台団地、52 年には市営里塚団地が造成されました。特に 57 年に里塚・真栄地区土地利用転換計画が策定されてから宅地開発が本格化し、東北部に緑ヶ丘団地などができるなど一気に宅地化が進み昭和 60 年には約 1900 戸、人口約 6300 人の新興住宅地域に変貌しました。

昭和 59 年には里塚南部に羊ヶ丘通ニュータウンなどの開発で区画整理事業が進み美しが丘と平成 9 年には里塚北東部に里塚緑ヶ丘の新しい行政地名が誕生しました。里塚と里塚緑ヶ丘には約 17000 人、美しが丘の人口を含めると清田区の人口約 11 万 3000 人（令和 2 年）のおよそ 4 分の 1 を占めています。

平成 30 年の北海道胆振東部地震では里塚 1 条 1・2 丁目周辺の約 2ha が液状化現象で陥没し大きな被害が発生し、被災地の復旧と液状化防止のために薬液注入や暗渠管敷設などの工事が行われました。

ここは三里川の流路だった谷底部に火山灰土を盛土して昭和 50 年代中頃に宅地造成された場所

で地下水位も高く液状化現象の起こりやすい条件が重なっていました。「昭和 25 年版地形図」ではこのあたりの谷底部にわずかに水田が分布していたことがわかります。

平岡公園 昭和のニュータウンに囲まれた梅林公園

平岡公園は清田区の北東部にあります。環状グリーンベルト構想の拠点となる総合公園として、昭和 57 年から造成され 66.3ha の広さがあります。公園のほぼ中央を道央自動車道が南北に縦断し、その東側 18 ha に野球場、テニスコート、ゲートボール場などの運動施設が整備されています。西側 48.4 ha にはすり鉢状の地形をした 6.5 ha の敷地に梅林があり、現在約 12000 本の豊後性の白梅と紅梅が 6 対 4 の割合で植栽されています。5 月上旬にサクラとほぼ同じ時期に開花し 2 週間程度楽しむことができ、市民に人気の花見スポットとして毎年 10 万人以上の来園者で賑わいます。

公園の西端には自然の湿地が広がりヨシを主体にカサスゲやミズバショウの群落などもあります。公園の 55% を占める自然林にはヤナギ類やハンノキなどの樹木が観察でき、キタキツネやカワセミなど様々な動物や四季折々の花や木々の姿を楽しむことができます。

公園内の北側には平成 14 年に開園した人工湿地があり、ミズゴケ・スゲ群落を主体とした湿地を再現し、市民ボランティアと協働で植栽・維持管理を行っています。

開拓の歴史は古く、すでに明治 2 年ころには札幌越（現国道 36 号）沿いの厚別川と交差するあたりに木村某が通行屋を営んでいました。

本格的な開墾は明治 6 年に月寒開拓団の一員だった岩手県出身の長岡重治が入植したのが最初で、厚別神社の前身となる小祠を祀ったり、自宅の納屋を改造してやがて清田小学校となる教育所を提供するなど地域の発展に大きな貢献をしました。

やがて街道沿いに長岡重治の子、徳太郎がこの通行屋を継ぎ札幌への玄関口として利用され、明治 20 年ころには長岡商店となっています。その後、次第に入植する人が増えますが明治 20 年代はわずか 12~3 戸でした。

明治 30 年代中ころには、厚別川流域の清田、真栄、北野で稲作が行われるようになり、平岡、里塚、有明では畑作や酪農を営む牧場がありました。「大正 5 年版地形図」を見ると小川や湧水があって水の豊富だった沢地や三里川沿いには水田が分布しています。

平岡周辺には大正初期に 15 戸、昭和 9 年には 25 戸の農家があり農事実行組合が設立されています。大正期から始まったリンゴ栽培は昭和 30 年代中頃まで行われていました。農地以外の丘陵部は入植当時から里山として利用され、入植時から昭和 30 年ころまで炭焼きが盛んに行われていて平岡公園内にも炭焼き窯の跡が数か所残っています。

月寒台地の上にあり、当初は月寒村字^{あしりべつ}厚別で坂の上と呼ばれていた地域でしたが、昭和 19 年の字名改称で平坦な台地・岡という意味から平岡と改称されました。現在は平岡に加えて平岡公園と平岡公園東の行政地名があります。

昭和 30 年代後半から次第に都市化の波が押し寄せるようになり、36 年の清田団地を皮切りに 38 年に八望台団地、45 年に北野団地、真栄団地と次々に大型団地が造成されました。

平岡には昭和 49 年に総合商社丸紅が手掛けた札幌市東部地域の大規模ニュータウンプロジェクトにより、平岡公園の北部から東部を取り囲むように平岡公園ベニータウン・ライブヒルズ、ライブヒルズウェスト・コート、ライブヒルズ・こもれびの街の大型団地が造成されました。令和 2 年現在平岡地区の人口は約 22500 人で清田区人口の約 20% を占めています。

興産社 藍生産で成功した開墾会社

興産社はあいの里および拓北にあった地名で篠路村の字地名に興産社大野地と興産社沼方がありました。「大正5年版地形図」には興産社地内の地名が記されています。現在も町内会名や興産社大野地通とか興産社中央（バス停名）などに地名が残っています。

興産社は明治14年に徳島県の滝本五郎、その実弟阿部興人らによって設立された開墾会社で15年に大規模農業開拓を夢見て入植しました。924haの未開地の払い下げを受けて入植者17名が大豆、小豆、そば、粟、キビなどの雑穀のほか藍の栽培を行いました。当時藍は商品性が高く、1年の生活費が30円ほどだった時代に1haあたり葉の生産だけで70円以上の収入が得られました。

明治18年には徳島県から藍加工の技術者を雇い入れ、藍染めの原料となるすくもの加工にも成功し藍玉（すくもを突き固めたもの）製造所を設置し自前で藍の加工をはじめました。明治19年には篠路興産社株式会社を設立し、藍生産を本格化します。

このころ北海道庁の殖産政策により排水事業や道路整備が行われ、さらに2000円の補助金支給を受けるなどして事業を拡大させました。以後製造所も2棟増設され販路は全国に及び、明治23年の内国勸業博覧会で興産社の藍玉が一等有功賞を受賞しその品質も保証され、藍の作付は篠路から丘珠、白石、余市、仁木などへも拡大し、原料の買い入れだけでなく種子や肥料、機械の貸し付けなども行いました。

しかし、明治30年代に入るところには化学染料が台頭し藍栽培は衰退します。「興産社」は明治30年に藍栽培を停止して畑作へ転換しますが、明治32年に解散しています。

あいの里 「愛の里」ではなく「藍の里」

あいの里は篠路町拓北に昭和59年に生まれた新しい行政地名です。北は国道337号（生振バイパス）、南はJR学園都市線、西は篠路町拓北、東は石狩川に囲まれた地域です。日本住宅公団や北海道住宅供給公社が主体となり昭和55年に始まる「拓北ニュータウン計画」で造成された広さ378.2haのニュータウンで一般的に「あいの里団地」と呼ばれています。

昭和62年に北海道教育大学札幌校が中央区から移転し、その前年に学園都市線あいの里教育大学駅が開業しました。駅前には北海道医療大学と附属大学病院もあり「学園都市 あいの里」をキャッチフレーズに分譲が進められました。平成7年には東側にある釜谷白駅も「あいの里公園駅」に改称されています。計画人口は32000人ですが令和元年現在、あいの里の人口は約2万人にとどまっています。

地名の由来はニュータウンにふさわしいロマンチックな「愛の里」を連想させますが、実は「藍の里」がその語源です。

明治15年ここで滝本五郎らが興産社を設立して藍の栽培を始め、この地域の主要作物として広く栽培され地域経済を支えましたが、明治30年代に入ると化学染料の台頭で衰退し藍の栽培はすっかり姿を消しました。そんな開拓の歴史を残すために付けられた地名です。

平成15年にあいの里公園駅南側にニュータウン開発をするため南あいの里区画整理組合がつくられました。平成27年まで総事業費約70億円をかけて49.8haの宅地造成が行われ令和元年現在、約4千人が居住しています。これに伴い平成18年に南あいの里の行政地名が誕生しました。

福移 「當別太」へ入植した「筑前開墾」

福移は札幌市の北東端、篠路町の石狩川左岸にあります。現在は豊平川が南側から、当別川が北側から合流する近くにあり、南側は中沼町に北側は石狩川を境界に当別町と接しています。

明治 15 年、生活に困窮していた筑前（福岡県）の士族救済を目的に北海道移住が勧められ、農商務省から 60 戸分 12000 円の資金貸与を受けて福本誠をリーダーに「北海道移住開墾社」が組織されました。5 月には予定よりは減ったものの士族 51 戸、175 名がこの地に入植し筑前開墾と呼ばれました。

しかし、入植当初幹部が貸与金のほとんどを海産物投機につぎ込み喪失してしまったため最初から開拓は困難を極めました。

入植後も度重なる石狩川の氾濫によって苦しめられ、この地を離れる者も多くいました。明治後期には石狩川の治水対策で蛇行部の直線化により開墾した農地が流路となり水没したところもありました。

もともとこの一帯はアイヌ語で「当別川・沼のような川・の川口」を意味する「ト・ペツ・プト」と呼ばれ、入植当初は當別太の漢字地名があてられていました。

「明治 29 年版地形図」にも當別太と記されています。「大正 5 年版地形図」には札幌大橋のあたりに下當別太、現篠路清掃工場界限に中當別太さらに上流の石狩川左岸沿いに上當別太の地名がありました。

石狩川右岸の當別村にもちょうど篠路村上當別太の対岸に下當別太、さらにその上流旧石狩川右岸に上當別太の地名がありました。

正式には昭和 12 年の字名改正で篠路村當別太が篠路村福移となりました。當別村に同名の地名があり、それとの混同を避け福岡から移住してきた筑前開墾の歴史を残すため福移の地名にしたと考えられます。

「昭和 25 年版地形図」では、篠路村上當別に福移、中當別に中福移、下當別太に下福移の地名が記され、昭和 30 年に篠路村が札幌市に併合されて札幌市篠路町福移となりました。

荒井村・荒井金助 札幌建設構想「イシカリ建府論」の提唱者

荒井村（上荒井村・下荒井村）は 1855（安政 2）年、現在の篠路町篠路付近に幕府の命によって開設された村で「篠路村」の前身となりました。石狩役所長官だった荒井金助が私費を投じて農家 8 戸とともに開墾に乗り出し、1857（安政 4）年に村の氏神として篠路八幡社を造営しました。1859（安政 6・万延元）年にすでにケネウシベツ川（琴似川）付近に入植し米作にも成功していた在住武士^{そうやま}早山清太郎が 42 歳のころにリーダーとして農民 10 数戸、約 50 人を入植させたのが始まりです。

荒井も入植者も強く米作を希望しましたが、厳しい気候環境下にあることから早山^{そうやま}清太郎は米作 4 割、雑穀、野菜 6 割の耕作を守らせ生産の安定をはかりました。名主は世襲制とせず 3 年交代とし任期中は渋田畑六と改名させたというエピソードもあります。

荒井金助は 1808 年に江戸で生まれた幕吏で、1857（安政 4）年堀利熙^{ほりとしひろ}に取り立てられ石狩役所長官として、あしかけ 9 年間在任しました。

このころロシアの南下政策が差し迫る中で北海道の開拓は緊急の課題でした。そこで 1855（安政 2）年に松前藩領地を除く蝦夷地全域を幕府の直轄とし、それを統括する箱館奉行の初代奉行に任じら

れたのが掘でした。

荒井や堀は石狩を蝦夷地開拓の中心とし、北方警備の拠点とする構想を持っていました。そのためにはここに一定の経済活動を構築し定住する人口を増やす必要がありました。二人はそのためのイシカリ改革を実践していきます。

第一は場所請負制の中で、非道な搾取や扱いを受けていたアイヌ民族との融和を図り請負人にアイヌへの非道な扱いをあらためるよう厳重な警告を通達しています。次いで請負商人が独占していた漁場請負を廃止し、漁場を出稼ぎの希望者に分け与える自由出願制（直捌）^{じかきばき}としました。これによって出稼ぎや定住する人も増え、商工人も集まり集落が形成されていきました。

イシカリ改革の実現には、後背に広がる石狩平野の農業開拓が必須で、荒井村は札幌周辺で拓かれた最初の農業集落となります。これをきっかけに以後、丘珠村、琴似村、札幌村などが次々と開村されていきます。

荒井はイシカリ建府論を提唱し後の札幌本府建設を予測していました。そのためには函館から伊達、苫小牧、千歳、札幌を經由して銭函、小樽まで道央を貫通する札幌越新道の開削が蝦夷地開拓の礎になると考えていました。そして札幌へ至るには豊平川を渡河するルートを確認する必要があり、荒井は部下であった志村鐵一と吉田茂八を豊平川両岸（豊平橋付近）に家族ともども定住させ渡し船の管理をさせました。そしてこの二人が札幌の開祖となりました。

明治2年から松浦武四郎の進言によって開拓判官島義勇^{よしたけ}が札幌本府の建設を始めますが、堀と荒井は幕末期には既にイシカリ建府論を提唱していて松浦もそうした考えを知っていたはずです。その意味では荒井や堀が今日の札幌の発展の基礎を築いたと評価してもよさそうです。

中島村・中島彦左衛門 幕末に篠路・太平にあった古い村です。

中島村は太平のあたりにあった地名で最初に入植した中島彦左衛門の名前に由来しています。「大正5年版地形図」には太平4条1丁目近くに中島と麻生町8丁目の創成川に中嶋橋の地名があります。すでに消えかけてしまった地名ですが札幌市資料「各区橋梁一覧」（平成25年）には同じ場所に中島橋があり「市販市街地図」（平成29年）にもその橋梁名が記載されています。「道路請負工事関係書 札幌支庁工事係」（明治32年）には篠路村字中島とあり中島橋も記載されています。

「札幌沿革史」には「荒井村の南方に、*45 在住士中島勝彦なるもの農村を開設し、中島村といふ其の名主初代を半次といひ二代を兼松といふ、明治三年、上下荒井村中島村の三村を合わせて、篠路村といふ」（後略）と記載されています。

「北海道地名大辞典 地名編 篠路」角川書店（昭和58年）には「万延元年ハツシヤブ（発寒）在住の中島彦左衛門が移民を募って現在の上篠路に入植して中島村と称した。その後中島の退去により、荒井村と中島村を併せて篠路村となり」（後略）と記載されています。

また他の資料では「万延元年星置から入植した中島彦左衛門が中島村を開いた」（後略）とか、「安政6年早山清太郎は琴似にいた中島彦左衛門らを荒井村の南西隣接地に入植してもらい中島村を開いた」とあります。

中島が星置から入植したのか琴似・ハツシヤブ（発寒）からなのか、これも食い違っていますが「手稲開基110年誌 手稲の今昔」（昭和56年）には「安政4年 星置には中川金之助、中島彦右エ門等が残った」（後略）とあります。

中島の場所は「札幌沿革史」に「荒井村の南方」とか「荒井村の南西隣接地」の説明があり、「大

正5年地形図」に中島や中島橋と記載されている場所です。現在の太平あたりだったことは間違いなく「上荒井村」の村域にあったと考えられます。

札幌地理サークル 2021年度 決算報告

収 入		支 出	
19年度繰越金	26657	会誌印刷費	17040
会 費	6000	郵 送 費	1170
		文具・消耗品	110
		駐車場代	420
		Web管理費	5000
収 入 合 計	32657	支 出 合 計	23740

繰越金 8917

札幌地理サークル 2022年度 予算案

収 入		支 出	
20年度繰越金	8917	会誌印刷費	0
会 費	6000	郵 送 費	0
		文具・消耗品	1000
		Web管理費	5000
		予 備 費	8917
収 入 合 計	14917	支 出 合 計	14917

会 誌 第 55 号

令和4年5月

札幌地理サークル

会 長 金森 正郎(札幌啓成) kmasao@plum.ocn.ne.jp

会誌担当 大久保雅弘(藤女子・非) moasa@ab.auone-net.jp

ウェブサイト: <http://chiricircle.michikusa.jp>